

生々流転する形而上的自己

山田 悠至

はじめに

思想を語ることは己の病の告白であり、哲学的営為は自己救済である。自分を救えるのは自分だけであり、自分で自分を救いたいという想いが全ての哲学の根底にある。

九鬼周造¹という哲学者がいる。彼は『「いき」の構造』において、花街という虚実入り混じる苦界の女性をモチーフとし、自己が如何に生成し、「いき」がどのように成立するかを思索した。芸者遊びに興じ、祇園から大学へ駆けつける²、華やかな肩書とは裏腹にどこか哀しみを湛えた顔立ちと、底なしの静寂を内に秘めた詩人哲学者が「異端者たるの覚悟」³を持って問うた「いき」とは何であったのか。そこで本稿では、なぜ九鬼周造が「いき」を論じざるを得なかったのか、そして「いき」がどのようにして自己救済となったのかを考察する。

生い立ちから「いき」へ

九鬼周造は 1888 年、父・隆一と母・波津(又は波津子)の四男として東京・芝に生まれる。父・隆一は文部官僚を経て駐米全権公使、帝国博物館総長、貴族院議員を務めた男爵、母・波津は京都・祇園出身の芸者であった⁴。当時の花街は身売りした貧しい女が創る「虚構の世界」⁵であり、九鬼周造は「光」であるエリート之父と、「影」である苦界之母との間に言わば光と影の「交点」⁶として生まれ、世の中の明暗を複眼的に見る人生を歩むことになる。隆一が駐米公使であった 1887 年に夫に同行していた波津の懐妊がわかり、隆一は波津を日本で出産させるため当時部下であった岡倉天心にエスコートを託して日本へ帰

す.ところがワシントンから日本までの30日間の船旅で天心と波津は恋に落ち、隆一と波津は離婚、波津はこの事件を機に精神を病み、後に長く精神病院に入院することになる⁷。そのため周造が物心ついた頃には既に“普通の家庭”は崩壊しており⁸、彼は父と母、光と影の狭間で引き裂かれ自己存立の基盤を失くしていた。人間には自己の基盤が必要であり、その基盤の多くは幼少期に親をはじめとする濃密な交流が可能な他者を通して形成される。そのため親は自己形成の基盤を提供すると同時に、自己に巨大な影響を与え、拘束し、介入し続けることになる。そうした中で「周造は生母の波津子にかぎらない憧憬を抱く」⁹。これは基盤を求め、始原としての母への止み難い欲求が生じたためであり、また周造が男性としてのペルソナ¹⁰を要求される中で母をアニマ¹¹として措定することで内的欠如を補完し、自己形成を試みた結果でもある。しかし彼の基盤は壊れたままであり、母喪失の状況下で母の生きた花街の美意識「いき」への探求が周造にとって切実な課題となる。それは母への途が断たれた後も、母の人生を支えた美意識を思想的に受容することで、象徴としての母との対話を通して自己基盤を得ようとしたためである。

ここで周造にとって「哲学は個性の体験から生れる」のであり、「体験に基いた認識である」¹²とすれば、母の影を追い求めた「いき」への探求にこそ周造の描く自己基盤の元型が横たわっているはずである。そこで本稿では「いき」を構成する三要素に着目して「いき」が描く自己の姿について考察する。また従来の見方では周造は「いき」の内包的構造として「媚態」と「意気地」と「諦め」を挙げ、「いき」は「媚態」を基礎とし、これに「意気地」と「諦め」が付加されることで成立すると考えてきた¹³。しかし、こうした従来の構造的把握ではなく、本稿では「媚態」と「意気地」と「諦め」という三つの契機の機能的把握により拓かれる動的な自己存立のあり方を追ってみたい。

出会いとしての自己

まず九鬼周造によれば、自己存立のあり方を考察するには「抽象の哲学」と「現実の哲学」という二つの立場がある¹⁴。「抽象の哲学は思考によって存在を構成する。即ち「甲は甲である」という同一律によってのみ存在を解釈する」¹⁵。

そのため「生成」や「変化」は起り得ない。なぜなら生成とは無から有に移ることであり、一つの状態から他の状態に移る過程で両方の状態を合わせ持つ状態が出現するが、こうした無と有というような乖離の概念が同時に措定されることは抽象的思考においては不可能だからである。つまり無から有への移行は同一律に矛盾しているのである。さらに甲＝甲も厳密には二つの甲が区別されているため同一律とは言えない。そのため最も厳密な同一律を存在のあり方に適用すれば端的に甲ということになる。以上から抽象の哲学は永遠・不変で分割できない絶対的な一者だけが実在すると考える¹⁶。他方で「現実の哲学」は本質的には同一律は必ずしも適用されないと考える。それは「与えられた現実には矛盾はないので反対があるのみである」¹⁷からである。つまり無と有とが矛盾していることは単に思考によってのみ生じる結果であり、現実には無と有とは「矛盾」ではなく「反対」であるだけである。そして反対の状態であれば、例えば白と黒という反対の色が同時に存在して灰色になるように共存は可能である。こうして現実を「反対の一致」によって解釈し、同一律の絶対的適応を排斥することで、乖離の概念が同時に措定されることを可能にするのが現実の哲学の立場であり、その結果、世界は絶え間ない生成として捉えられる¹⁸。そして「凡そ人間の悩みから生れ、人間の悩みに訴える哲学でなければ生命を有った哲学ではない」¹⁹のであり、「哲学とは人生観を含んだ世界観である」²⁰と考える九鬼にとっての自己存立を考える時、出発点として個別性・特殊性の把握を志向する「現実の哲学」を採用することがふさわしい。

こうした前提のもとで自己とは「もの」ではなく「こと」＝「自分であること」であり²¹、「私は汝を認めることによって私であり、汝は私を認めることによって汝である」²²とすれば自己基盤は自らの存在根拠を自らのうちに持たず「他者によって」存在するため他因的である²³。そのため「いき」が「一元的の自己が自己に対して異性を措定し、自己と異性との間に可能的関係を構成する二元的態度」²⁴を要求するように、自己存立は男と女、さらに自己と他者という二元的構図を前提とする。そして「自己が自己として自らを自覚しうるのは、自己が自己ならざるものに出会った時である」²⁵とすれば、この二元的構図において自己は他者との「出会い」により生成する。では自己と他者は如何にして出会うのであろうか。

引力と斥力の狭間で

プラトンによれば、人間は元来男女両性を備えた「全一」なる存在であり、神により一身に宿った両性が引き裂かれ現在の男女別々の姿になった²⁶。そのため人間は元の「全一」なる姿に帰るべく常にかつての片割れを探し求める。ここに片割れが片割れとして自覚する「寂しさ」と、一つの片割れが他の片割れを求めて全きものになろうとする「恋しさ」が生まれ²⁷、自らの欠如を埋めようとして異性(他者)との間で互いを引き合う引力が生じる。これを「媚態」とすれば、媚態は男女、さらに自他が色気を媒介として「接近する程、強度を増し」²⁸、自他の距離を出来る限り近づけようとする自他合一的志向である。

しかし異性(他者)との合一を前にして人間は根源的な「無への不安」に襲われる。自己は他者を待って初めて自己たり得るのであり、他者との一元化は自己消滅を意味する。そこは自他の区別も対立もない安寧な「無」の世界だが、「自己保存の欲求」²⁹を持つ人間は「自己を完全に失ってしまうのではないか」という不安に耐えられなくなる。一度自他の区別を識った人間は二度と自他の区別も自己概念もない無の世界には戻れないのであり、無の世界から逃れようとする衝動が自他合一を阻止する斥力として生じる。これを「意気地」とすれば、意気地は「異性に対して一種の反抗を示す強味をもった意識」³⁰であり、異性(他者)との一元化を目指す欲望に支配されない自他分離的志向として働く。

この斥力により自他は再び遠く離れ、今度は自己存立の前提である他者が見えなくなり、他者喪失による自己消滅の不安から再び引力による自他接近へと向かう。結局、自他の完全な合一も絶対的な分離も他者喪失による自己消滅を意味し、自他は媚態と意気地という引力と斥力の狭間で出会いと別れを繰り返しながら、その都度の自己と他者を立ち上がらせる。ここで自他の出会いにより生成する自己と他者は、出会う前には生成していないため³¹、如何にして両者は出会い得るのかという疑問が生じるが、それは「もの」としての自他が出会うことで「こと」としての自他が生成するためであると考えることができる³²。そして「こと」としての「自己とはそれ自身に関係するところの関係そのものである」³³とすれば、自己は引力と斥力の狭間で不安定に揺れ動く関係の中で瞬間毎の出会いと別れにより起滅を繰り返す「非連続の連続」³⁴としてあり、

この自己のあり様はちょうど「世の中は夢かうつつかうつつとも夢とも知らずありてなければ」³⁵ という歌の「ありてなければ(夢現つ)」、つまり「ありてない」、あるけれどもなく、ないけれどもある³⁶ 存在として立ち上がるのである。

こうした水平的な他者との出会いにより生成する「こと」としての自己の基盤とは何であろうか。非自己が他者であり、非他者が自己である以上、自己と他者は互いの否定として相互の存在を前提に定義される。そのため他者の定義には既に自己の存在が前提されており、自己の基盤を出会った他者の存在に求めることは循環論法に陥り不可能である。そこで自己の基盤を得るには、そもそも自己が他者と出会うのはなぜかという垂直的な根拠を考察する必要がある。

偶然性の海

では自己と他者が不安定に揺れ動く関係の中で出会う根拠とは何か。この問いに答えるには自他の出会いに至る因果系列を遡る必要がある。つまりある時空間 P で自己と他者が出会う場合を考え、出会う瞬間に自己が P に存在するという結果の原因 A_1 、さらに原因 A_1 の原因 A_2 、原因 A_2 の原因 A_3 …というように自己が P に至る因果系列 A_N (N は自然数) を指定する。同様に他者が自己と出会う瞬間に P に存在するという結果の原因 B_1 、さらに原因 B_1 の原因 B_2 、原因 B_2 の原因 B_3 …というように他者が P に至る因果系列 B_M (M は自然数) を指定する。そして自己と他者の出会いには因果関係に基づく根拠が存在するとすれば、自他の出会いという結果に至る原因が因果系列 A_N と B_M の間に見出せるはずであり、この共通原因を $C_1 (=A_{N1}=B_{M1})$ とおく。すると自他の出会いという結果の原因 C_1 に対して、さらに原因 C_1 の原因 C_2 、原因 C_2 の原因 C_3 …というように自他の出会いに至る因果系列 C_i (i は自然数) を指定できる。そして自他の出会いに至った原因の連鎖を無窮に遡って行き、最初の原因 C_n (n は自然数) を考える時、この原因 C_n が必然であったと仮定する。すると原因 C_n が必然的に生じたのであれば、その必然性を頼りに原因 C_{n+1} にまで原因の連鎖を遡ることが出来てしまい、これは原因 C_n が自他の出会いに至った原因の連鎖の終着点であることに矛盾する。このことから原因 C_n を必然と仮定したことは誤りであり、原因 C_n は偶然であったことがわかる。つまり自己と他者が出会う原因を突き詰め

れば「初めに偶然があった」のであり、偶然性はどこまでも「無概念的、無関係的なもの」³⁷であるから自己と他者の出会いは無根拠であり、自他の出会いにより生じる自己の存在も突き詰めれば無根拠だとわかる。あらゆる時、あらゆる場所で繰り返される自己と他者の出会いは全て無根拠に支配された「偶然性の海」³⁸から、まさに偶然立ち昇った因果系列の先端で生じる奇跡の現象であり、他者との邂逅で生じる自己は偶々こうしてあるが、ないこともあり得た存在である。その意味で自己は「この場所」にまた「この瞬間」に産み落とされた尖端的な虚弱的な存在³⁹であり、「無の深淵の上に壊れ易い仮小屋を建てて住んでいる」⁴⁰ようなものなのである。

ここに来て議論は自己存在の根拠への問いをどこまでも突き詰めていった結果、自己存在そのものが無根拠性の中へ消えていくという極めて逆説的な事態に至ったのである。

偶然性という不変の原理を諦め/明らめる

ヘラクレイトス(Herakleitos)は「万物は流転する」と言い、世界の原理は運動であり、万物は対立することにより生成変化すると考えた。そして変化するのは変化しないものがある初めて変化するとし、変化の根底に不変の原理を想定した⁴¹。そして今、「遠い遠いところ……私が生まれたよりももっと遠いところ……そこではまだ可能が可能のままであったところ」⁴²である偶然性の海から偶然立ち昇った因果系列の先端で、媚態と意気地という引力と斥力により絶えず揺れ動き、邂逅と別離を繰り返しながら起滅する自己が示すのは、偶然性が不変の原理だということである。そして自己を生む始原の偶然性を一種の「運命」と考えれば、「運命に対する知見に基づいて執着を離脱した無関心」⁴³としての「諦め」により運命をありのままに受容することで「垢抜して(諦)、張のある(意気地)、色っぽさ(媚態)」⁴⁴としての「いき」が成立する。つまり「いき」とは常に偶然性に対して身を開き、偶然性を含み込んだ生き方⁴⁵なのである。

また諦めとは、断念するという意味と同時に「明らめ(諦め)」として真理を明らかにするという意味を持ち⁴⁶、多くの邂逅と別離により自他の生々流転を

絶えず認識することで安定的な自己の基盤を諦め、自己の根底に「虚無」の真相を明らかにすることであり、自らの運命を踏み板として新たな自己の立脚点を得る創造的態度である。そしてここにこそ「いき」が自己救済として機能し得る可能性が開かれている。

自己救済としての「いき」

九鬼周造により理論化された「媚態」と「意気地」と「諦め」を契機として成立する「いき」は元来、化政期以降の深川芸者を中心とした江戸色道論⁴⁷における美意識であり、「女性の生」の原理をテーマとしていた⁴⁸。そこでは金で買われた貧しい女が徹底的に磨き上げられ「虚構の女」⁴⁹となり、虚構空間としての遊里で男女の駆け引きを繰り広げ、「誠は嘘の皮、うそはまことのほね、まよへばうそもまこととなり、さとればまこともうそとなる。うそとまことの中の町、まよふもよし原、さともよし原」⁵⁰という遊戯的な男女関係が理想とされ、本当に見える嘘、嘘とわかりつつ信じる真心という虚実入り混じる自他の邂逅と別離をありのままに受け入れ軽やかに生きる生の美意識として「いき」は育まれた。

しかし虚実入り混じる苦界で邂逅と別離を繰り返しながら虚構の自己を生きているのは遊女だけであろうか。人は皆、何かを演じ、何かになりすまして生きているのであり、この世は「うそとまことの中の町」で、この世の生は「浮かみもやらぬ、流れのうき(浮き・憂き)身」⁵¹である。そして私も汝も、一切衆生も始原において自ら各々の生を選んだわけでも、選べたわけでもない、様々な可能性があった中で、なぜこの現実なのか。「糸より細き縁ぢやもの、つい切れ易くて綻びて」⁵²という出会いと別れの中で無から有へ、有から無へと生々流転する自己を必死に生きながら、揺らぐ自他関係から立ち上がる儂い自己の根拠を懸命に求めた末に自己の根源的な無根拠性を悟り、「どこからともなくやってきて、どこにあるとも知れず、どこへともなく去っていく」⁵³ 自己のあり様を正面からありのままに受容する。そこで初めて自己の現実を無いこともあり得た無数の可能性の中から偶々生成した一つに過ぎず変わりゆくものだと考えることで、身動きがとれず凝り固まった苦界の自己から解放され、自己への

新たな展望を開くことができる。そして偶然生成し流転する自己ゆえに自己を生きることに関りない自由を見出し、自らの現実を自らあつかも意志したかの如く受容し生きる時に「いき」という現象が立ち上がり、自己救済としての「いき」の境地が開けるのである。

おわりに

人間は自己の基盤を求める生き物であり、その基盤の多くは幼少期に親をはじめとする濃密な交流が可能な他者を通して形成される。そのため親の存在は自己の安定的な保持に役立つ一方で、基盤に刻印され、生涯にわたり自己に暴力的な介入し、自己を拘束し続けることになる。しかし九鬼周造の場合は親の機能的欠如により基盤形成ができず、常に自己の不安定さ、儚さに苦しみ続けることになる。そのため生涯を通して基盤を求め、始原の場である母、さらに母の生きた花街の美意識「いき」へと哲学的探求を続ける。そして自己の本来的な流動性と、始原的な偶然性を明らかにし、基盤を求めるという行為自体の虚無性を解き明かし、それゆえに自己とは介入も拘束もなく自由に創造的に生きられるものであることを突き止めた。これは自己の基盤が客観的実体を持たず主観世界の中に立ち上がるものであり、また混沌とした偶然性の海から創発するものであることを示している。そしてこの創発の仕方は極めて個別的・特殊的であり、そのあり様も可塑性に富み、その時々々の自己のあり様により偶然を介してチューニングされ、変化していく可能性を示している。そしてこのチューニング内容はどのような環境や自他関係を経験するかにより流動的であり、九鬼周造はその流動性を明らかにし、そこに自由を見出し、哲学的思索による形而上的自己チューニングの可能性を拓いたのである⁵⁴。そして、これこそが「いき」の境地であり、母の生きた世界の美学でもあった。彼にとって「いき」の哲学とは不安定な自己を肯定し、救済するための生存を懸けた営みであり、「生き」かたであったのである。

彼は「皮相的なことは脇に置いておこう、私はあらゆるものの根底にあるものについて語りたい」⁵⁵ と言い、「いき」という花街特有の現象の中に人間精神の全体的表現⁵⁶を探り、普遍的な自己の原理を求めた⁵⁷。ただ、「胸に暗黒な

ものを有って暗黒のために悩まなければ哲学らしい哲学は生まれて来ない」⁵⁸ のであり、「婀娜っぽい、かろらかな微笑の裏に眞摯な熱い涙のほのかな痕跡を見詰めたときに、はじめて「いき」の眞相を把握し得た」⁵⁹ と言うように、「いき」という自己救済の地平は決して無代価で得られたものではないのである。

註

1. 1888年東京市芝区(当時)に生まれる。東京帝国大学哲学科卒業、同大学院退学後の1921年からヨーロッパへ足かけ8年間留学。リッケルト、サルトル、フッサール、ハイデガーらから直接哲学を学ぶ。帰国後1929年に京都帝国大学哲学科講師に就任。翌1930年に『「いき」の構造』を刊行、後に京都帝国大学哲学科教授となり1941年逝去。
2. 鷲田清一『京都の平熱』(講談社、2007)83頁。
3. 九鬼周造「「いき」の構造」『九鬼周造全集』第1巻(岩波書店、1981)13頁。
4. 波津は「もと京都花柳界の出身で、九鬼[隆一]がそこから彼女を引上げて男爵夫人の位置を与へた」(岡倉一雄『父天心』(聖文閣、1939)150頁)と考えられてきたが詳細は不明であり、波津は九鬼家の「小間使」であった(清見陸郎『岡倉天心』(平凡社、1934))とする説や、「花柳界」の出身とすれば京都祇園ではなく「東京の新橋」とする説(大岡信「波津子・天心・周造」『図書』第376号、1980)もある。九鬼隆一は1871年に慶應義塾に入塾し、1872年から文部省に出仕していた頃に波津と知り合ったことを考えると波津が「東京の新橋」出身の芸者であった可能性は十分にある。
5. 上野千鶴子『性愛論』(河出書房新社、1994)13頁。また当時の時代状況について丸山眞男は「開国」(『現代倫理』第11巻(筑摩書房、1959)102頁)で次のように述べている。「社会的な怨恨(ルサンチマン)の大きな発酵素になったのは、維新革命の重要な推進力であった下級武士の分解である。これらのうち明治政府の官吏になった者は、いち早く洋服を着、髪を切り、靴を穿き、権者を蓄え、まさに文明開化の陽光を満身に浴びていたが、然らざる者は次々と身分的特権を剥奪され、甚だしい窮境に落ちた」。こうした中で「旗本御家人の妻女で売笑婦となり、田舎から来た成り上がりの官員に媚を呈しなければならぬ悲境」が生じたのである。
6. 小浜善信『九鬼周造の哲学』(昭和堂、2006)10頁。
7. 田中久文『九鬼周造』(ペリかん社、1992)15-17頁。
8. 坂部恵『不在の歌』(TBSブリタニカ、1990)15-22頁。
9. 松本清張『岡倉天心』(新潮社、1984)45頁。
10. ペルソナは元々古典劇で役者が用いた仮面のことで、ここでは人間の外界に対する人格的構えのこと。
11. ユング心理学の発想の根本は、「心の動きや働きには人類共通のパターンがある」というものであり、ユングはこのパターンを元型と名付けた。そして元型は人間の外界に対する人格的構えであるペルソナと、内面に秘かに(多くは無意識に)持つ心的構え(男性の場合はアニマ、女性の場合はアニムス)とに分類できる。(C.G.ユング、(訳)林道義『元型論』(紀伊國屋書店、1999)464-495頁)男性の場合は「男性らしさ」としてのペ

- ルソナを持つ時、内面に女性的人格要因であり、男性が女性について抱く心像としてのアニマ(E.ユング、(訳)笠原嘉、吉本千鶴子『内なる異性』(海鳴社、1976) 64頁)を持つことで自身の意識の態度の欠落を補い、内外の平衡を保つことで自己を形成する。女性の場合は、「女性らしさ」としてのペルソナに対して、内面に男性的要因であり、女性が男性に対して抱く心像としてのアニムスを持つことで内的欠落を補い、自己形成する。(河合隼雄『ユング心理学入門』(培風館、1967) 197,208頁)
12. 九鬼周造「現代フランス哲学講義」『九鬼周造全集』第8巻(岩波書店、1981) 13頁。
 13. 九鬼周造「『いき』の構造」『九鬼周造全集』第1巻(岩波書店、1981) 21頁。
 14. 九鬼周造「講義 偶然性」『九鬼周造全集』第11巻(岩波書店、1980) 207-221頁。
 15. 前掲書 207頁。
 16. 古川雄嗣『偶然と運命』(ナカニシヤ出版、2015) 44-45頁。
 17. 九鬼周造「講義 偶然性」『九鬼周造全集』第11巻(岩波書店、1980) 214頁。
 18. 古川雄嗣『偶然と運命』(ナカニシヤ出版、2015) 46頁。
 19. 九鬼周造「現代フランス哲学講義」『九鬼周造全集』第8巻(岩波書店、1981) 14頁。
 20. 前掲書 13頁。
 21. 木村敏『時間と自己』(中央公論社、1982) 9頁。
 22. 西田幾多郎「私と汝」『西田幾多郎全集』第6巻(岩波書店、1965) 381頁。
 23. ここで「自因的」は自らの存在根拠を自らのうちに持つこと、「他因的」は自らの存在根拠を自らのうちに持たず「他者によって」在ることとすれば、他者との関係に基盤を持つ自己とは他因的であると言える。
 24. 九鬼周造「『いき』の構造」『九鬼周造全集』第1巻(岩波書店、1981) 17頁。
 25. 木村敏『人と人との間』(弘文堂、1972) 14頁。
 26. プラトン、(訳)久保勉『饗宴』(岩波書店、2009) 83-84頁。
 27. 九鬼周造「情緒の系図」『九鬼周造全集』第4巻(岩波書店、1981) 188頁。
 28. 九鬼周造「『いき』の構造」『九鬼周造全集』第1巻(岩波書店、1981) 17頁。
 29. 宮野真生子『なぜ、私たちは恋をして生きるのか』(ナカニシヤ出版、2014) 68頁。
 30. 九鬼周造「『いき』の構造」『九鬼周造全集』第1巻(岩波書店、1981) 18頁。
 31. 「個人あって経験あるにあらざ、経験あって個人あるのである」(西田幾多郎「善の研究」『西田幾多郎全集』第1巻(岩波書店、1965) 4頁)というように、自己と他者があって両者が出会うのではなく、出会いによって自己と他者が生成するのである。
 32. 「物来って我を照らす」(西田幾多郎「知識の客観性について」『西田幾多郎全集』第10巻(岩波書店、1965) 427頁)という西田の発想も、「物」つまり「もの」としての自己と他者が出会うことで「我を照らす」、つまり「こと」としての自己が生成することを表現していると考えることができる。
 33. キェルケゴール、(訳)齊藤信治『死に至る病』(岩波書店、1939) 20頁。
 34. 西田幾多郎「私と汝」『西田幾多郎全集』第6巻(岩波書店、1965) 343頁。
 35. 小島憲之、新井栄蔵(校注)『新日本古典文学大系 5 古今和歌集』(岩波書店、1989) 283頁。
 36. 竹内整一、金泰昌(編)『「おのずから」と「みずから」のあわい』(東京大学出版会、2010) 17頁。
 37. 九鬼周造「偶然性の問題」『九鬼周造全集』第2巻(岩波書店、1980) 249頁。
 38. 常に繰り返される自己と他者の出会いには因果系列を遡ると各々の出会い毎の偶然性があり、起滅を繰り返す自他の根源にある無数の偶然の総体を本稿では偶然性の海と呼ぶ。

39. 九鬼周造「偶然性の問題」『九鬼周造全集』第2巻（岩波書店、1980）249頁。
40. 九鬼周造「小唄のレコード」『九鬼周造全集』第5巻（岩波書店、1981）170頁。
41. 河上正秀（編）『他者性の時代』（世界思想社、2005）171-173頁。
42. 九鬼周造「音と匂」『九鬼周造全集』第5巻（岩波書店、1981）168頁。
43. 九鬼周造「「いき」の構造」『九鬼周造全集』第1巻（岩波書店、1981）19頁。
44. 前掲書 23頁。
45. 田中久文『九鬼周造』（ペリかん社、1992）114-115頁。ここで「いき」と「偶然性」の概念を安易に結びつけるべきではないという反論は当然予想される。両者の関連については『「いき」の構造』において直接明示されておらず、『偶然性の問題』においても「いき」を論じた箇所は存在しない。ただ九鬼周造が『「いき」の構造』を執筆した1926-1930年という時期は、彼が講演「偶然性」（1929年）や講義「偶然性其他二、三の哲学問題」（1930年）を行った時期と重なっている。さらに『「いき」の構造』における「媚態」の定義で、「媚態とは、一元的の自己が自己に対して異性を指定し、自己と異性との間に可能的関係を構成する二元的態度である」（『九鬼周造全集』第1巻（岩波書店、1981）17頁）と述べるのと、『偶然性の問題』で「偶然性」の定義として「偶然性は一者と他者の二元性のあるところに初めて存するのである」（『九鬼周造全集』第2巻（岩波書店、1980）255頁）と述べる箇所は明らかな対応を示している。そのため「いき」と「偶然性」は「根本のところでも照応している」（小浜善信『九鬼周造の哲学』（昭和堂、2006）67-68頁）のであり、「いき」という生き方を「形而上的・宇宙論的次元に高めた」のが『偶然性の問題』であると考えられる（前掲書176頁）。
46. 田中久文『日本美を哲学する』（青土社、2013）130頁。
47. 遊里でのあるべき男女関係を説くのが「色道」と呼ばれる価値基準であり、そこでは遊戯的な関係こそが理想とされ、この遊戯の精神をもとに化政期以降に確立した美意識が「いき」である。
48. 小浜善信『九鬼周造の哲学』（昭和堂、2006）103頁。
49. 上野千鶴子『性愛論』（河出書房新社、1994）13頁。
50. 中野三敏、日野龍夫ら（校注）『新日本古典文学大系 84 寝惚先生文集 狂歌才蔵集 四方のあか』（岩波書店、1993）250頁。
51. 九鬼周造「「いき」の構造」『九鬼周造全集』第1巻（岩波書店、1981）20頁。
52. 前掲書 20頁。
53. 小浜善信『九鬼周造の哲学』（昭和堂、2006）215頁。
54. ここで形而上的自己チューニングとは具体的実体のない「いき」という美意識、さらにその背後にある象徴としての母についての哲学的思索を通して自己の基盤形成をすることを指す。
55. 九鬼周造「日本の事」『九鬼周造全集』第1巻（岩波書店、1981）445頁。
56. 大東俊一『九鬼周造と日本文化論』（梓出版社、1996）85頁。
57. 「一般は個別の中にあられるのである。また個別は特殊な仕方一般を表はそうとするのである」（九鬼周造「人間と実存」『九鬼周造全集』第3巻（岩波書店、1981）290頁）と言うように、九鬼周造は「いき」という特殊な個別の中に現れる自己の一般的な原理を追求した。
58. 九鬼周造「現代フランス哲学講義」『九鬼周造全集』第8巻（岩波書店、1981）14頁。
59. 九鬼周造「「いき」の構造」『九鬼周造全集』第1巻（岩波書店、1981）20頁。

参考文献

- 上野千鶴子『性愛論』（河出書房新社，1994）
岡倉一雄『父天心』（聖文閣，1939）
小浜善信『九鬼周造の哲学』（昭和堂，2006）
河合隼雄『ユング心理学入門』（培風館，1967）
河上正秀（編）『他者性の時代』（世界思想社，2005）
キェルケゴール，（訳）齊藤信治『死に至る病』（岩波書店，1939）
木村敏『人と人との間』（弘文堂，1972）
木村敏『時間と自己』（中央公論社，1982）
清見陸郎『岡倉天心』（平凡社，1934）
九鬼周造『九鬼周造全集 第1-5,8,11巻』（岩波書店，1980-1981）
小島憲之，新井栄蔵（校注）『新日本古典文学大系5 古今和歌集』（岩波書店，1989）
坂部恵『不在の歌』（TBS プリタニカ，1990）
坂部恵，藤田正勝，鷺田清一（編）『九鬼周造の世界』（ミネルヴァ書房，2002）
大東俊一『九鬼周造と日本文化論』（粹出版社，1996）
高橋眞司『九鬼隆一の研究』（未来社，2008）
竹内整一，金泰昌（編）『「おのずから」と「みずから」のあわい』（東京大学出版会，2010）
田中久文『九鬼周造』（ぺりかん社，1992）
田中久文『日本美を哲学する』（青土社，2013）
中野三敏，日野龍夫ら（校注）『新日本古典文学大系84 寝惚先生文集 狂歌才蔵集 四方のあか』（岩波書店，1993）
西田幾多郎『西田幾多郎全集 第1,6,10巻』（岩波書店，1965）
プラトン，（訳）久保勉『饗宴』（岩波書店，2009）
古川雄嗣『偶然と運命』（ナカニシヤ出版，2015）
松本清張『岡倉天心』（新潮社，1984）
丸山眞男「開国」『現代倫理 第11巻』（筑摩書房，1959）79-112頁
宮野真生子『なぜ，私たちは恋をして生きるのか』（ナカニシヤ出版，2014）

安田武，多田道太郎『『いき』の構造』を読む』（朝日新聞社，1979）

C.G.ユング，（訳）林道義『元型論』（紀伊國屋書店，1999）

E.ユング，（訳）笠原嘉，吉本千鶴子『内なる異性』（海鳴社，1976）

鷺田清一 『京都の平熱』（講談社，2007）